

## 日本の外国語学習及び教育の歴史を振り返る 日本の英語学習及び教育目的論再考

佐藤 義 隆

教養・言語センター

(2001年9月12日受理)

Looking Back the History of Learning and Teaching Foreign Languages in Japan  
Reconfirming of the Purpose of Learning and Education of English in Japan

Culture and Language Center

Gifu Women's University, 80 Taromaru Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SATO Yoshitaka

(Received September 12, 2001)

### Synopsis

This brief thesis aims at reconfirming the purpose of learning and teaching of English through studying history of them in Japan. Before the beginning of English learning, Japanese people had already learned some languages such as Chinese, Korean, Portugese, and Dutch. Especially the system of education in Ogata Koan's "Teki Juku" which was one of language learning schools in Japan in the nineteenth century helped Japanese people to learn English effectively and systematically. The English learning began when the English ship "Fhaeton" came to Japan in 1808. Japanese intellectuals made splendid efforts to master English and publish books on English. After the Meiji Restoration till today, there have been two main theories about the purpose of learning and teaching English; one is to understand and absorb different cultures, and the other is to communicate with people who speak English. As the globalization in every ways is spreading rapidly, however, we are to live in the society where we need to speak a common language like English and understand different cultures and respect each other. So, purpose to learn a foreign language especially English today is to communicate with other nation's people and to cultivate a mind of cultural relativism which means an intercultural understanding.

### 梗 概

この短い論文は、日本の英語学習及び教育の歴史を振り返ることによって、それらの目的を再確認することにあります。英語学習が始まる前にも日本人は既に、中国語、朝鮮語、ポルトガル語、それにオランダ語を学んでいます。特に19世紀の日本における外国語塾の一つであった緒方洪庵の「適塾」の教育システムは、日本人がその後英語を効果的にそして体系的に学ぶのに役立ちました。英語学習はイギリス船「フェートン号」が日本へやってきた1808年に始まります。それ以来日本の知識人達は英語をマスターするために必死に努力し、数々の英語学習に関する本を出版します。明治維新から今日まで、英語学習及び教育の目的論に関しては、主に二つの考え方があります。一つは、異なった文化を理解し吸収するためという考え方であり、

もう一つは英語を話す人々とコミュニケーションするためという考え方です。しかし、現在ではあらゆる方面でグローバル化が進み、これからは私達は英語のような共通語を話し、異なった文化を理解し、お互いに尊敬しあうことが必要な社会に住むことになります。だから、今日の英語を筆頭とした外国語学習の目的は、他の国の人々とコミュニケーションがとれるようにするためと、文化の相互理解を意味する「文化相対主義」の心を培うことだと思います。

## 1. はじめに

私達は英語の勉強の目的は自明のこととされていると思うのですが、社会言語学者の鈴木孝夫氏は、現在の日本の英語教育の最大の問題点は英語の使用目的を見極めていないことから生じていると説いていることからわかるように、自明のことではないのです。鈴木氏は、それまでの英語学習及び教育目的論を吟味したあとで、目標とする外国語を、目的言語、手段言語、交流言語の三つに分類し、それぞれの目標に合わせて外国語の学習と教育は行なわれるべきだと主張し、それまで明確ではなかった英語学習及び教育の目的論を明瞭な形で示すことに成功しました。目的言語とは、例えば、我々がトルコの文化や民族について学ぶためにトルコ語を学ぶ場合のように、その言語自体を最終目標として学ぶ場合の言語のことです。手段言語とは、その言語に蓄積されている人類の知識や学問を入手するために学ぶ場合の言語のことです。物理学や生物学を学ぶためにフランス語やドイツ語を学ぶのがこれにあたります。交流言語とは、言語を国際交流の手段として学ぶ場合の言語のことです。現在の英語の国際的地位のことを考えると英語の学習がこれにあたります。こうした彼の用語を使って、日本のこれまでの英語学習及び教育は何に重きを置いて行なわれてきたのかを分析し、最終的には今後の英語学習と教育のあるべき姿を導き出したいと思います。

## 2. 英語学習以前の外国語学習の状況

### (1)中国語、朝鮮語、ポルトガル語

外国語学習の最古のものは中国語、朝鮮語ですね。中国の文字言語も5～6世紀には既に朝鮮経由で我が国に伝えられ、以来、日本では漢字を学び、漢字漢文を用いてものを書くという形式が確立し、漢字から仮名を作り出して日本語に加えていきました。それは今日まで連綿と続いているわけです。鈴木氏の分類からいけば、この頃の中国語・朝鮮語学習は両国の知識や学問入手のための手段言語としての役割が最大だと思うのですが、言語の学習を一つの目的だけに絞ることは無理があつて、目的言語として学ぶ面もあつたでしょうし、両国の人々と直接交わる立場にあつた人々は当然交流言語として、それらの言葉を使いこなしていたはずで、要は時代によって外国語学習の目的が何に大きな比重が置かれていたかで、この時代は今のように国をあげて国際交流のために外国語を学ぶというような状況にはなかつたので、当然手段言語としての色合いが強かつたと思います。

日本と西欧の接触はポルトガルが1543年に鉄砲を伝えてからであり、これ以降、日本にポルトガルをはじめとする南蛮文化が齎らされ、今も日本語の中には、カステラ、タバコ、テンブラ、パン、コンペイトウ、メリヤス、カルタ、等のポルトガル語が残っています。

### (2)オランダ語

次に学んだのがオランダ語でした。江戸時

代を通してオランダ語は学ばれていました。1740年には八代将軍吉宗が青木昆陽にオランダ語を学ばせたと記してあります。日本語の中にはオランダ語が沢山入っていますが、代表的な言葉としては、ゴム、チョコッキ、ビール、ランドセル、コック、コップ、ガラス、スコップ、オテンバ、オルゴール等があります。オランダ語学習には2種類ありました。一つは実用オランダ語で、長崎出島のオランダ商館員との交渉のため、世襲制の通詞（通訳）が学んでいたものです。もう一つは蘭学です。これは医学をはじめとする学問のためのオランダ語学習で、1771年に江戸小塚原での腑分けを見学した医師前野良沢と杉田玄白らはオランダ医学書に掲載されている人体構造図と全く同じなのを見て、1774年にオランダの医学書『ターヘルアナトミア』を翻訳します。所謂『解体新書』といわれるものです。序でにいいますと、『ターヘルアナトミア』の翻訳者は、一般的には杉田玄白となっていますが、吉村昭さんが数年前に中日新聞の朝刊の連載小説で書いた『彦九郎山河』によりますと、3年がかりで前野良沢が一人で訳したのですが、不完全な訳故に訳者名を杉田玄白に譲ったと書いてありました。

それはさておき、これ以降オランダ語学習は江戸、長崎だけでなく、全国に広まってきました。そうした気運の中から、長崎鳴滝塾のシーボルトのように、外国人が教える塾も出てきましたし、1783年に大槻玄沢が作った『蘭学階梯』のような教科書も出てきますし、辞書の編集、蘭学塾や藩校の開設等、オランダ語学習の環境が整備されていき、その中に緒方洪庵の「適塾」という一大オランダ語学習センターが出現するわけです。こうした環境の中で、蘭学研究、オランダ語教授法が確立されていき、これが結果的に、英語教育前史を形成することになります。つまりこ

の準備期間があったために次の英語学習がスムーズにいったということです。ここではその「適塾」をちょっと紹介したいと思います。

### (3) 緒方洪庵の「適塾」

「適塾」の創設者緒方洪庵は、岡岡で生まれ17才から大阪で蘭学を学び、江戸・長崎で医学、オランダ語の修業に励み、日本にあったオランダ語の原書を全て読破して、蘭学を志すもののために「適塾」を開きます。これが天保9年(1838年)のことです。「適塾」は大阪船場にありました。ここは海外の文物が集まってくるところでもありました。「適塾」は月6回のテストをやる競争方式の勉強の場でした。塾生達は2階の30畳の大部屋で学びましたが縛る規則はなかったので、夏はふんどしいっちょうで勉強しました。しかし、月6回のテストで学力を厳しく審査されたので、柱には鬱憤晴らしの刀傷が残っています。人にあたるよりはいいでしょう。先輩の指導を受けながら自力で学ぶのが「適塾」の教育方針でテストが近づくとい冊しかないオランダ語の辞書『ズーフハルマ』を皆で奪い合いました。夜中に行っても満員なので、立って見て写しました。今の学生達は如何に恵まれているか知るべしですね。

洪庵が座右の銘にしていたものは「人のために生活して己れのために生活せざること」ということでした。洪庵は西洋の進んだ科学技術を積極的に取り入れて、人々のために尽くそうとしました。その精神の頭れの一つが「適塾」であり、「除痘館」でした。「除痘館」というのは天然痘の予防接種を施す施設でした。オランダ語学習はオランダの医学書を読んで医療の分野で人々に尽くすためでした。洪庵とその門下生にとっては、その外国語学習の目的がはっきりしていたということですね。鈴木孝夫氏の分類でいけば手段言語とし

て彼らはオランダ語を学んでいたということです。語学の勉強のために一番必要なのは、こうした動機や目的なのだということを痛感します。そしてもう一つの洪庵の偉大さは、その目的達成のために自習と自由競争という、効果的な学習システムを創り出したことだと思います。education という言葉は、educo というラテン語からきていて、「引き出す」という意味を持っています。教育とは教え込むのではなく、本人の能力を本人が引き出せるようにアシストすることだと思います。この点からも洪庵は教育の意味をよく知っていたといえます。

これは余談ですが、洪庵と同じ時期にもう一つ優れた塾がありました。吉田松蔭の「松下村塾」です。この塾は「適塾」とは違ってマンツウマン方式をとっていました。彼は真心をもって物事にあたり、勉学を社会や国家のために尽くすことを信条としていました。人の優れたところを伸ばし、得意を伸ばすように心掛け、誉めてやる気を起こさせることを忘れませんでした。教育学用語にビッグマリオン効果というのがありますが、これは、誉めればその子の力は伸びるというものです。松蔭にはそのことがよくわかっていたのです。また松蔭はその人の性質にあったように接していきました。そのようにして人を見抜いて、一人一人に別々の教科書を与えて勉強させたそうです。この塾からは伊藤博文や高杉晋作がでています。「適塾」と「松下村塾」の教育方針は、現代でも非常に参考になるもので、今後教育界に求められることは、長い時間をかけて、「適塾」や「松下村塾」のようなものの裾野を広げていく努力をすることではないでしょうか。

#### (4)「適塾」出身者

「適塾」には塾生が全国から集まり、創設

以来24年間に千人が学び、ここから慶応義塾大学創設者福沢諭吉、陸軍創設者大村益次郎、日本赤十字社の基礎を作った佐野常民、手塚治虫の曾祖父手塚良庵等がでています。ここでは福沢諭吉と手塚良庵について触れようと思います。

#### 福沢諭吉

福沢諭吉の『福翁自伝』によれば、「適塾」は学力別クラス編成で、連続してトップの成績をとると上の級へ進むことができ、中級クラスへあがるのに早いもので2カ月、遅いもので2年1カ月かかったとあります。封建的身分制度に嫌気がさして大阪に出て来た福沢諭吉は、実力主義の「適塾」で明け方まで勉強し、入門して2年で塾頭になります。身分に関係なく実力が問われる「適塾」では自分との闘いの連続で、苦しかったけれど理解できた時の嬉しさがたまらなかったと福沢は書いています。後に諭吉が書いた「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」で始まる『学問のすすめ』は明治の大ベストセラーとなり、70万部売れたそうですが、「適塾」との出会いも、彼のそうした思想形成に大きな役割を果たしたのだと思います。

#### 手塚良庵

もう一人是非紹介しておきたい「適塾」出身者は、先程ちょっと触れた手塚良庵で、彼は漫画家手塚治虫の曾祖父なのです。手塚治虫は彼の曾祖父手塚良庵のことを、歴史漫画『陽だまりの樹』全七巻で描いていますので、それに基づいて良庵のことをちょっと紹介したいと思います。

江戸で医者をしている手塚良仙の息子良庵も父の後を継いで医者を目指していますが、「適塾」より入門許可証が届き、狂喜して大阪へ向かいます。しかし彼はちゃらんぼらんな性格で、その上女遊びが好きで、大阪へ着いた日も廓へ直行して、その後で「適塾」へ行く

というありさまでした。それ以降も廓から朝帰り、「適塾」へ通っていましたが、オランダ語の勉強も進まず、先輩に読んで訳すようにいわれても全くできませんでした。誰にでも、これがなければ勉強できるのに！というものがあるようですね。緒方洪庵も手塚良庵にはあきれていました。この時良庵29才、安政2年、1855年のことでした。その後、洪庵の感化と母の励ましで、どうにか修業を終え、江戸へ戻って開業し、その後幕府軍歩兵隊軍医となり、明治政府のもとでも軍医となり、西南の役で従軍し、九州で赤痢にかかり、それがもとで亡くなります。良庵51才の時でした。

良庵が生きた時代は、蘭方医学が、権力と癒着している漢方医学に厳しく抑圧されながら、実力でそれをはね返し、世に認められていく時代でした。良庵の父良仙は、漢方医の反対を押し退けて、大変な努力の末、東京神田お玉が池に、種痘所を作ることに成功します。これは後に医学所と名前を変え、明治に入り東京医学校となり、さらに後に東京大学の医学部となります。手塚治虫は曾祖父のことを知った時、曾祖父の中に自分と重なる姿を見いだしました。良庵の生き方に自分の生き方が重なったのです。手塚治虫はそういう視点で『陽だまりの樹』を書いています。良庵は、幕末から明治へという動乱の中で、反権力の姿勢を守りました。手塚治虫も、敗戦から高度成長という変動期に、漫画への偏見に抗しながら生きました。そうした自分の生き方を曾祖父のイメージに投影して描いたのです。これは余談ですが、昨秋、筆者が奉職している大学の英文科の研修旅行で今は大阪大学が管理している「適塾記念館」へいきました。筆者は4回目でしたが、学生達は初めて緒方洪庵の精神に触れ、福沢諭吉や手塚良庵の生き方に刺激を受けて帰ってきたよう

です。外国語の学習目的を再考するよい機会になったようです。

### 3. 明治維新までの英語学習

#### (1) フェートン号事件

英語学習のきっかけはフェートン号事件でした。19世紀のはじめ、ナポレオンがオランダを征服すると、イギリスは東洋各地のオランダ植民地を奪おうとしました。文化5年(1808年)にイギリス船フェートン号が、オランダの国旗を掲げて長崎へ来ます。オランダ船とばかり思って出迎えた長崎通詞やオランダ商館員を捕らえて湾内を測量し、燃料、食料を出させて去っていきます。長崎奉行は責任を取って切腹し、これ以降、海外政策が強化され、1825年には異国船打ち払い令へと発展していきます。

一方、この事件でオランダ語以外の外国語学習の必要性を感じた幕府は、翌1809年にオランダ通詞に英語とロシア語の学習を命じました。ロシアの脅威も迫っていたからです。これが日本の英語学習の最初になったのです。明治維新より59年前のことです。因みに、西欧で強国となってきたフランスの言語であるフランス語の学習もこのフェートン号事件のあった1808年に始まっていますし、ドイツ語の学習は1860年に始まることとなります。

#### (2) 明治維新までの英語学習の流れ

このようにして始まった英語学習の流れの中から、通詞本木庄左衛門は1811年に英単語や会話文を載せた『厄利亞興学小笈(あんげりあこうがくしょうせん)』という本を出版し、1814年には我が国最初の英和辞典である『厄利亞語林大成(あんげりあごりんたいせい)』を出版しました。特に後者は、アルファベット順に配列された初の英和辞典で、縦書きで約6千語を収録し、オランダ語の同義語

も添えられています。また本木は、両書とも発音をカタカナで示し実用性を追求しましたが、Are you an English man?という英語に、「エレ・ユー・エン・エングリス・メン」と記すなど、オランダ語のような発音がそのまま記されていて、完璧なものではありませんでした。それでもこのような表記法は以後の外国語学習関係書の編集に大きな影響を及ぼし、外国語を身近なものにするのに役立ちました。しかし、このようにして始まった辞典編纂事業も、通詞達の多忙で停滞し、堀達之助編纂の名著『英和对訳袖珍辞書』(えいわたいやくしゅうちんじしょ)が刊行されるのは文久二年(1862年)のことです。袖珍とは、袖に入るほどの小型のものという意味です。しかし、それまでも英語学習は続いていましたので、本木の仕事以降明治維新までの英語学習の主要な事項を年代順に述べてみます。

1840年には、英文法書が初めて翻訳されます。渋川敬直訳の『英文鑑』です。原本はLindley Murray, *English Grammar* (1795)の蘭訳本(1822)でした。

1848年には、アメリカ人青年 Ranald MacDonald が利尻島へ漂流を装って上陸し、そこから長崎へ護送され、オランダ語通詞14名に英語を教えました。これが英語を母語とする教師の第一号となりました。

1856年には、蘭学を主に、英学を副としたオランダ語と英語の学習機関である蕃書調書(ばんしょしらべしよ)が幕府によって創設されました。1860年にはフランス語科、ドイツ語科、ロシア語科も新設されました。蕃書調書は1862年には洋書調書と改称され、1863年には開成所と改称されます。またこの間に、幕府は長崎に英語伝習所を開設しています。

1859年には中浜万次郎(ジョン・万次郎)が『英米対話捷徑』という本を出版していま

す。捷徑(しょうけい)とは近道という意味です。中浜万次郎は1827年に土佐の漁師の家に生まれますが、14才の時に漁に出て嵐に会い、漂流しますが、アメリカの捕鯨船に助けられてアメリカへ行きます。この時の船長ウィリアム・ホイットフィールドに気に入られ、マサチューセッツの船長の家でアメリカ生活が始まります。万次郎16才の時です。1850年(23才)に、帰国の費用を稼ぎに、ゴールド・ラッシュで沸くカリフォルニアへ行き、そこで稼いだ600ドルで帰国します。1851年、24才の時です。そして1860年には、福沢諭吉とともに咸臨丸に随行し、ウエブスター辞典を購入して帰国します。その他に万次郎が土産に持ち帰ったものとしては、ミシンと写真機がよく知られていて、帰国後その写真機で妻をはじめとする幾つかの写真をとっています。万次郎は1869年(明治2年)には東大の前身開成学校の教授となり、1870年にはヨーロッパ視察にでかけ、その途中、ホイットフィールド船長宅を訪問し、一泊しています。1898年(明治31年)、万次郎71才の時、脳溢血で死去しますが、それ以降も中浜家とホイットフィールド家の交流は現代まで続いていて、1992年には明治村で「ジョン・万次郎展」が開かれ、その時の図録の監修をされたのが中浜家4代目の中浜博氏でした。因みに井伏鱒二も『ジョン万次郎漂流記』という本を昭和12年に書いています。ジョン・万次郎の英語学習は交流言語に始まり、通訳や開成学校の教授と進むにつれて、目的言語や手段言語としての側面も大いに加わり、交流言語を中心とした総合的な英語学習をしたことがわかります。

話しをまた明治維新までの英語学習の歴史に戻しますと、1859年、福沢諭吉は横浜見物に出掛け、今後は英語が必要になると痛感し、英語の独学を始めます。

1866年には、James Curtis Hepburn (1815 - 1911) が岸田吟香とともに、日本初の和英辞典『和英語林集成』を出版します。ヘップバーンはペンシルバニア大学で医学を修めた宣教師で、1859年に日本へ来ました。伝道の傍ら横浜で開業し、名医としての評判を得ました。傍ら、ローマ字による日本語の表記法を考案し、(所謂ヘボン式ローマ字といわれるものです)それによって和英辞典の『語林集成』を作ったのです。ヘボンというのは、当時の日本人には、ヘップバーンがヘボンに聞こえたので、ヘボンという呼称が定着したようです。また、聖書の和訳にも貢献したり、その後私塾を開いて英語を教え、今日の明治学院の基礎を作りました。そして1892年(明治25年)にアメリカへ帰国しました。

#### 4. 明治期の英語学習

明治期の英語学習は、手探り状態で開始されたといえます。外国語学習の先例は蘭学しかありませんでした。蘭学は解説(つまり読んで訳すという学習の仕方です)を主にしていましたので、英語学習もその影響を大きく受けました。音声や発音にはそれほど注意せず、解説を通して内容の把握を重んじることが優先されました。これは日本人教師が教える場合に多く見られ、「変則英語」と呼ばれました。これに対して、外国人教師や宣教師が英語を教える時は、音声・発音を重視し、反復練習を繰り返し行ないました。これは日本人が教える「変則英語」に対して、「正則英語」と呼ばれました。この対立がずっと続いていくことになるのですが、実際は、「変則英語」と「正則英語」は相互に競合するというよりもむしろ、補い合うことの方が多かったようです。

明治時代の社会主義者に松山出身の村井知至(ともよし)という人がいますが、彼は明

治12年に同志社へ行き、クリスチャンになり、二度アメリカへ留学し、1899年には『社会主義』という本を出版していますが、彼は自分の英語学習を回顧して、郷里の中学では変則で英語の読み方を習い、外国人の塾でしっかり発音を鍛えられ、留学してから実地に英語使用の実習を重ねて自分の英語が出来上がった、と言っています。村井氏は、メドレーという人と共著の形で英語参考書を多数書いているそうなので、筆者もいつかこうした本に目を通してみたいと思っています。村井氏の英語学習の過程は今の我々にも参考になり、英語学習に限らず、語学の学習に必要なのは総合学習であり、目的別に、目的言語、手段言語、交流言語と分けてみても、最終的には総合力が必要であり、ただとっかかりの始める動機の力点の置き方によって主に力を入れるのが交流言語であったり、目的言語であったり、手段言語であったりするのだと思います。

#### 5. 明治から今日までの英語学習目的論

明治から今日まで、多くの先人達が英語学習の目的について激しい議論を闘わせてきましたが、それは既に明治期の「変則英語」と「正則英語」に見られたように、教養としての英語を学ぶのか、実用としての英語を学ぶのかという、二つの目的論の闘いがあったといつてよいと思います。明治から今日までの英語学習及び教育の歴史を辿る代わりに、この二つの目的論を詳しく見ていくことによって、それに代えたいと思います。

##### (1) 教養論の系譜

###### 内村鑑三の目的論

内村鑑三(1861 - 1930)は、『外国語の研究』(1899)の中で、外国語を学ぶことは「其之に依て顕はるる思想を解」するためである、

と言っています。言語はその国の思想や魂を表わすものであるから、西欧の精髓に触れ、西欧の文化・文明を会得するためには西欧の言語を学ばねばならないということです。従って、当時の英語学習及び教育は、英語の文化・文明を吸収することが第一義的なことだったのです。

#### 岡倉由三郎の目的論

岡倉由三郎(1868 - 1936)は英語教育の専門家であり、名著『英語教育』(1911)の中で、英語教育の目的を3つあげています。第一に、異文化理解を通して、文化の相対性に目を開くこと、第二に、日本語と異なった音声、構造、語彙を有する言語に触れることを通して、言語認識を深め、知的刺激を与えること、第三に、英語を媒介として種々の知的感情を摂取し、欧米の文化・文明に原書を通して直接触れることによって我が国の文化・文明・思想に刺激を与え、その発展に資することをあげています。

#### 金子健二の目的論

金子健二(1880 - 1962)は、『言葉の研究と言葉の教授』(1923)の中で外国語教育の実用的価値を否定しています。金子は外国語学習に実用的価値を求めるのは皮相な功利主義であり、外国語学習は、学習者を人文的・道徳的に教化し、内面的に高めるためであると主張しています。

#### 福原麟太郎の目的論

福原麟太郎(1894 - 1981)は、『英語教育論』(1948)の中で、明治時代は日本は未開国であったため、内村や岡倉が目的とした西欧文明吸収のためというのは意義があったが、西欧の列強に伍する文化と文明を持つに至った日本では文明開化のために外国語を学ぶのではなく、その言葉を通してその国民性や文化の特性を学ぶべきであると説いています。このようにして異文化に接触することによ

て、日本人は外国の文化・国民性を客観的に理解し、これを批判することができるようになります、このような批判的考察力が自己の文化・国民性をより深く理解し、認識できるようになるのだと説いています。福原の目的論は自文化理解のための教養論だということがわかります。ここで思い出されるのはゲーテやキプリングの言葉ではないでしょうか。ゲーテは「外国語を知らない人は自国語をも知らない」と言っていますし、キプリングは「イギリスしか知らない者がどうしてイギリスを知っていると言えようか」と言っています。このような立場から福原は、ハロルド・パーマーのオーラル・メソッドの立場に立った新教授法を批判しましたが、筆者は語学は総合学習が理想だと思っていますので、両方必要だと思えます。

#### 長田新(おさだあらた)の目的論

ペスタロッチ研究者として有名な教育学者長田新(1887 - 1961)は、外国語教育は、ちょうど中国から漢字言語文化を学び、これを触媒にして日本語を豊かにしていったように、外国語の中から栄養を摂取して、母国語を育てるところに外国語教育の目的があると述べ、国語教育のための外国語教育・英語教育を主張しています。

#### 渡部昇一の目的論

渡部昇一(1930 - )は、日本語しか知らないならば、全く意識しなかった言語の本質、構造を、英語という外国語と格闘する中で学習者は意識的に認識するようになる、と主張しています。彼は、英語を古典として扱うことによって、総合的に知性を錬磨することができると考えています。

#### (2)実用主義の系譜

##### ハロルド・パーマーの目的論

1922年(大正11年)に招かれて来日し、14



年間にわたって日本の英語教育の発展に貢献したハロルド・パーマー(1877 - 1949)は、来日の前年に書いた *The Oral Method of Teaching Languages* に明らかなように、終始実用主義の立場を堅持し、この立場から日本の英語教育を改革しようとしました。彼は、一貫して話し言葉を中心とした実用的目的のために言語を教えるべきであると説いています。学習の初期の段階は特にそうで、パーマーによると、教養的価値が真に意味を持ち得るようになるのは、話し言葉から始めて、言語を思考の道具として駆使することができるようになってからであり、それまでの言語教育は実用的価値を求めて行なわれなければならないと言っています。話し言葉の学習を目標とするパーマーの実用主義的教授法は、大正時代から昭和初期にかけて教育現場において実践が試みられましたが、それまでの伝統的な教養主義的教授法に慣れていた教師達から大反発がおり、それは岡倉由三郎や福原麟太郎といった教養主義者達との深刻な対立へと発展していくこととなります。パーマーの教授法はオーラル・メソッドと呼ばれるもので、音声から入り、口頭訓練を重視するものです。そして、“oral introduction”や“questions and answers”を行ない、定型会話を取り入れて行なうもので、現在も中学・高校で使われている教授法です。パーマーの実用主義は戦後チャールズ・フリーズによって引き継がれていきます。

#### チャールズ・フリーズ

チャールズ・フリーズ(1887 - 1967)の教授法はオーラル・アプローチと呼ばれ、言語の本質は音声であるという考え方から、外国語学習の目的が何であれ、学習の第一段階では音声中心の指導が行なわれます。そして大事なものは、音声を重視するからといって、“reading”や“writing”を軽視するという意味

では決してないということです。これはパーマーも同じなのです。この他にオーラル・アプローチの特徴といえば、この教授法がアメリカ構造言語学と行動主義心理学を理論的柱としているところから、“mimicry-memorization practice”と“pattern practice”という指導技術を使っているところ。“mimicry-memorization practice”は“mim-mem”と省略されますが、この“mim-mem”は、戦時中のアメリカで行なわれたASTP(戦時中の言語集中訓練)でもよく用いられた訓練方法で、教師の示すモデル文を正確に模倣する学習方法です。“pattern practice”は、言語構造の型(パターン)が意識しなくても自動的に出てくるまで口頭練習して、その言語習慣を身につけてしまうものです。現在、中学・高校での英語の授業の指導過程は、復習、新教材の導入、読みと理解の点検、最後にまとめといったものが一般的ですが、この中を細かく見ていくと、その指導技術が、オーラル・アプローチからきているものが多く見られます。

#### 平泉渉の目的論

平泉渉(1929 - )は、1974年に平泉試案と呼ばれる英語教育改革案を提出しています。英語教育の目標は、コミュニケーションの手段として英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)を使う能力を身につけることだが、日本の国際的地位や国情に鑑み、国民の約5%が外国語、主として英語の実際的能力を身につければいいのであって、国民全員が英語を学ぶ必要はなく、高校でも英語の授業は完全選択制にして、大学入試からも英語をはずすべきであるというのがその骨子です。平泉試案が英語教師に与えたインパクトは計り知れないものがありました。平泉試案は、色々な意味で英語学習及び教育が、新しい時代に入ったことを実感させました。

#### 鈴木孝夫の目的論

鈴木孝夫が新しい視点から英語学習及び教育の目的論を展開したことは、前に触れましたが、この小論文の狙いは、彼が学習する目的別に分類した、目的言語、手段言語、交流言語という用語を使って日本のこれまでの外国語（特に英語について）学習及び教育の歴史を振り返ることでした。そして鈴木は、現代の学習者の殆どが英語を国際交流の道具として使いたがっているのだから、英語教育の目的は英語の運用能力を身につけることに尽きるといって、徹底の実用論を展開していることをつけ加えておきます。

#### 6. これからの外国語（特に英語）学習及び教育はどうあるべきか。

明治、大正、昭和初期までの時代は、地球レベルでの話し言葉によるコミュニケーションを可能にするような状況ではなかったもので、その時代は人文的教養を目的とした英語が学習され、教えられていたのに対して、今日では世界の急激な縮小、グローバル化が、国際交流を日常的なものにしてしまっています。その結果、地球社会におけるコミュニケーション手段を身につけることが緊急課題となっています。従って、これからは第一に、鈴木孝夫氏のいう、交流言語としての英語学習及び教育が最優先されるべきだと思います。第二に、これからの英語学習及び教育に必要なのは、異文化・異民族と共存する態度を育むものでなければならないと思います。地球の急速なグローバル化に伴い、私達は異なった民族、文化、価値体系とともに生きていく社会を迎えつつあります。このような多価値社会において、私達は自己と異なる民族、文化、価値を正しく理解し、尊重する態度を育んでいかなければならないと思います。これは新しい地球社会、国際社会を生きるのに不可欠な資質だと思います。私達は自分達の

基準で他の文化を判断する“ethnocentrism”（自文化中心主義）に陥りやすいのですが、これからは自文化を基準として異文化を優劣批評する態度を排除して、全ての文化にはそれなりの存在価値が内在していると考える“cultural relativism”（文化相対主義）の精神を浸透させていくことが大切だと思います。要するにこれからの英語学習及び教育の目的は、地球共通語としての英語のコミュニケーション能力の育成を通して、自己と異なる文化、個人を認め、彼らの価値観を尊重する心を培うこと、とまとめることができると思います。鈴木孝夫氏が分類した用語を使えば、交流言語としての英語を中心に学びながら、その中に、目的言語、手段言語として学ぶ内容を織り込んで学んでいくということですね。このように考えれば、先人達から学んだ目的論も入っていますし、地球社会の到来という新しい時代の要請にも応えていると思います。

#### 参考文献

1. 特別展「日米友好のかけ橋」図録『ジョン万次郎』、明治村、1992
2. 週刊 Time Travel 『再現日本史』第14号、講談社、2001
3. 図録『緒方洪庵と適塾』、トラヤ、1993
4. 片山嘉雄他編『新・英語科教育の研究』、大修館、1994
5. 米山朝二著『英語教育』、松柏社、1993
6. 土屋澄男・広野威志著『新英語科教育法入門』、研究社、2000
7. Michael Kikuoka, *John Mung's Story*, Kiri-hara Shoten, 1996
8. Joan McConnell, *Culture of the Heart*, Kin-seido, 1998